A：増沢氏 ワールドカップの開催が様々な人々の交流の場を作るきっかけと考えている。

Q2：このような時期にスポーツの世界大会を誘致することに意味があるのかという側面はどのように考えるべきか？

A：村山氏 スポーツには競技スポーツから日々の生活の中の運動まで様々な形があり、その全てにおいて価値がありそれがスポーツなのだということを国民に理解してもらうことが必要と考えている。

A：松沢氏 前回のオリンピック招致に負けたのは国民にコンセンサスがなかった。オリンピック開催することでの効果を考えるべき。例えば、国際性を高めることができる。

また、スポーツ施設が更新されるが、これが一過性のものではなく次の世代に利用され続けていけるものを設置されるべきである。このことが、ビジネスのワールドワイド化にも繋がると考えられる。

Q3：災害復興法の中で整備が続いているが、スポーツ運動に関するもの特にソフト的なものには補助が得られないのが現状であるがどのような施策が必要なのか？

A：松沢氏 復興交付金の使い勝手が悪いため、これを機能させることが必要である。

A：すでに一度申請を行いゼロ査定を受けている。しかし、こういった制度に対して計画を立てることで、スポーツを中心に人が集い、仲間が増えることにはつながっている。

A：村山氏 新しいスポーツ振興法では、競技団体へ資金が流れるようになっているため、国民にスポーツが大事だと言っていても日々の国民の活動には変化がない。

また、日々の地域の人々や子供たちの活動に対してスポーツ、運動、遊ぶ時間を作れるリーダーが必要である。このような意味で、スポーツの本質は選手強化だけではないということを広めていく必要があると考える。

Q4：スポーツに対する理解を深めバレーボールというスポーツに期待されるものは何か？

A：村山氏 バレーボールはボールを落とさないという精神性、そして手軽に円陣パスなどが行える文化性があり、このスポーツの面白さ、楽しさがありこれらが浸透すると良いと考える。

A：増田氏 スポーツは身近にあり、すぐにできるものという位置付けを浸透させると良いのではないか。

A：松沢氏 チームスポーツであることは地域のコミュニティー構築への貢献が高い。また、ママさんバレーのチーム数が多いことからも地域の活性化に役立ててもらえば良いと考える。さらには、国際支援、交流にも役に立ててもらうことが重要ではないか。

バレーボールを始めとしたチームスポーツは、リーダーシップ、チームワークを育てることから、地域のコミュニティーの構築や健康維持増進に貢献できるようになることが期待される。

最後に、司会の石手氏がこのシンポジウムをまとめ終了した。

フォーラム A

『混合バレーボール活動報告と新ルールへの参加型ディスカッション』

コーディネーター　藤村雄志氏（日本混合バレーボール連盟代表）
話題提供者　大江芳弘氏（日本混合バレーボール協会会長）

司会は松井氏が務め、藤村氏と大江氏の紹介の後、フォーラムが開始された。

はじめに、コーディネーターの藤村氏よりこれまでの経緯について説明があった。続いて、会長の大江氏より挨拶があり、フォーラムが開始された。

藤村氏より意見交換会としている狙いについてそして、混合バレーボールのルールやゲームのやり方について基本的な説明が行われ、その上でこの 10 年で 1000 チーム以上が活動しているとの報告があった。また、大江氏より混合バレーボール協会設立の背景の説明がなされ、次に通常の 6 人制のバレーボールとの違いが説明された。

現在、混合バレーボールの大会は各地区大会から全国大会までを開催している。例えば関東地域では 80 会場程度で年間の大会が行われている。

この 1 年の協会の活動としては、札幌などの新たな地域での大会の開催をした。また、運営した大会では震災の影響と考えられるが参加チームに 20% の減少がみられた。その他、被災地域への支援活動は物資支援や、チャリティー大会の開催、義援金の提供などを行ったとの紹介があった。

続いて参加型意見交換会と移行した。本フォーラムのテーマは、①ジャンピングサーブ、②バックアタック、③

パッシング、④タッチネット、⑤オーバーネットに絞った意見交換会とされた。

意見交換を行う際の前提は以下の通りとする。

・混合バレーボールをより多くの人に楽しんでもらいたい
・ラリー性の向上
・一人のプレーヤーの力で勝敗が左右されない
・JVA ルールとは大きく異ならないようにする

①ジャンピングサーブ（ジャンプフローターも含む）

現行ルールではジャンピングサーブは禁止となっている。

理由：使用者の 90% 以上が男性で、試合の中で 1 人のジャンプサーブで得点が動くケースが2 点以上あるため。

意見 A

適用の線引きは難しいのではないか。

大江氏:両足を床から離して打つサーブは禁止としている。

意見 B

ローテーションを交互に男女を配置しなければならないというルールを変えてみてはどうか、例えば前後衛を男女で分ける。

大江氏：男性と女性で前、後衛を入れ替えながらゲームを行うという発想がなかったため非常に興味深い。

意見 C

サービスエースは通常のジャンプサーブ以外でもあり得るため 1 点までは良いのではないか。

大江氏：打てる回数の制限は審判が本数を判断しづらくなってしまうなどの現象が出てきてしまう。また、ミスについて 2 失点とすると得点を取りあうというゲーム性からは主旨に合わないと考えている。

意見 D

混合バレーボールはラリーが続いて楽しいがレシーブ時に男性が飛び込むと女性としては怖いなどの意見があった。そのため、こういったことを加味するとルールをシンプルにして行った方が良いのではないか。

大江氏：現在は技術レベル別に大会カテゴリーを分類している。ケガの問題としては、男女混合であっても経験者同士では発生率が低いが、初級者が上級者に混ざっていると発生率が上がると考えられる。

②バックアタック

現行のルールではラリー中バックアタックの使用があった場合には、そのラリーに勝ったとしても相手チームにも一点が入る。

理由：使用者は 90% 以上が男性プレーヤーであった。混合バレーでは男性がセッターを行うチームが多い。そのため、前衛が女性プレーヤーのみということも出てくるため、バックアタックを禁止することはできないと考えている。

意見

フロントゾーンに着地しないことまたは、アタックラインをネットから離すことが必要なのではないか。また、ジャンプサーブは禁止した方が良いのではないか、あるいは着地位置がコートに入ることを禁止してはどうか。

大江氏：6 人制の JVA のルールに慣れている人が、混合バレーに気軽に入れるように今後も検討を重ねていきたい。

③パッシングに関して

現行ルールでは JVA 旧ルールで運用している。

理由 : バレーボールのプレー中のケガの多くはセンターライン付近で起こるため、現行の JVA ルールを運用するとけが人の増加が予想される。

意見

インタフェアーの概念を入れることを鑑みると原案で良いのではないか。

④タッチネット

現行のルールは・ラリー中にネットに触る行為、・ラリー前後にネットをつかむ、たたく、よりかかる行為、・ラリー後ネットにぶつかる行為 としてルールを運用している。

理由：意図としてはラリーに関係ない行為で点数が入らないようにするため。

意見

この案に賛成。基本的にネットには触らないべきと考える。

⑤オーバーネットに関して

現行ルールは JVA 準拠している。

・ただし、相手のプレーを妨害しないとしても、相手空間上で片手のみを使用して、ティッピング、及びヒットする行為はオーバーネットの反則とする。
・ただし、両手でボールを触ろうとした結果、片手でボールを扱う行為は反則にはならない。

理由：相手のスパイク攻撃以外は、相手空間上でブロックしてはいけないとしていた。

意見

年齢により変えて行った方が良いのではないか。

最後に藤村氏から協会へ協力依頼があった。そして、会長の大江氏から挨拶をもってシンポジウムを閉会した。